

# ミーゼス研究 (一)

—— オーストリア学派とミーゼス ——

村 田 稔 雄

まえがき

現代の経済思潮を社会主義、干渉主義 (interventionism)<sup>(1)</sup> および自由主義 (libertarianism)<sup>(2)</sup> の三つに大別するならば、それぞれに最も大きな影響を与えた書物として、マルクスの『資本論』、ケインズの『一般理論』ならびにミーゼスの『人間行為論』<sup>(3)</sup> を挙げる事ができる。

マルクスとケインズについては多数の書物や論文が発表されているが、ミーゼスについては東米雄氏により『貨幣及び流通手段の理論』<sup>(4)</sup> が、また筆者により『経済科学の根底』<sup>(5)</sup> が邦訳され、所説のうち、社会主義経済計算不能論、貨幣的景気変動理論、効用理論に基づく貨幣理論などがわが国に紹介されたに過ぎず、ミーゼスの全思想体系の解明を本格的に取扱った書物はまだ現われていない。

ロスバード (Murray N. Rothbard) が指摘したように、ウイクステイード (P. H. Wickstead)、タウシグ (F. W. Taussig)、フェッター (F. A. Fetter) などが著わした体系的な大著のあとには、これらに匹敵する労作が見られなくなり、経済学が断片的理論に寸断されてしまった。<sup>(6)</sup>

その反省として生まれたインターディシプリナリーな接近法は「学問の雑炊」とでもいうべきものであって、ミーゼスのいわゆる「意味論的混乱 (semantic confusion)」を経済学に持ち込む弊害をもたらした。

したがって第一次世界大戦後に現われた体系的経済理論の代表的大著である『人間行為論』の研究は、現代の経済学が陥入っている迷路からわれわれを救出して、再び広い視野に立った経済理論の総合的研究の道へと導くことである。

ミーゼスは一九七二年九月二十九日で満九一才を迎え、オーストリア学派の巨頭としてのみならず、自由主義の指導者として世界的に認められている。

したがって、ミーゼス研究の第一歩は、オーストリア学派とミーゼスとの関係を明らかにすることから始めるのが順序であろう。ただし、オーストリア学派とその生成については、林治一博士の『オーストリア学派研究序説』<sup>(7)</sup>の中で完璧な説明がなされており、学派の始祖カール・メンガーに関する研究を中心にポエーム・バヴェルクのオーストリア学派観も紹介されている。小論は、ミーゼスのオーストリア学派観をこれらと比較検討し、これまで分散していたミーゼスの経歴に関する資料を整理して、ミーゼス研究の起点たらしめようとするものである。

注 (1) 市場経済に対する政府干渉によって市場経済を維持発展しようと考える立場。現在のいわゆる資本主義国のほとんどがこの主義に基づく政策をとっている。

(2) 元来、自由主義は liberalism であったがそれが干渉主義者の名称に変化してしまったため、authoritarianism に対立する概念である libertarianism を用いて他と区別していた。しかし最近では干渉主義者もみずからを libertarian と呼ぶようになり、再び混乱をまねき、本来の自由主義者の中には、みずからを free market economist と呼んでいる者もある。

(3) Ludwig von Mises, *Human Action: A Treatise on Economics*, 3rd rev. ed. Chicago: Henry Regnery Co., 1966.

初版は一九四九年。改訂版は一九六三年に出版されたが、誤植が多かったので、一九六六年に同一内容を改訂第三版として

出版するにいたった。

- (4) Ludwig von Mises, *Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel*. 2. neubearbeitete Auflage. München und Leipzig: Duncker & Humblot, 1924. 東米雄訳『貨幣及び流通手段の理論』、実業之日本社、一九四九年。
- (5) Ludwig von Mises, *The Ultimate Foundation of Economic Science: An Essay on Method*. Princeton, N. J.: D. Van Nostrand Co., Inc., 1962. 村田稔雄訳『経済科学の根底』経済論壇社、一九六九年。
- (6) Murray N. Rothbard, *Man Economy, and State: A Treatise on Economic Principles*. Princeton, N. J.: D. Van Nostrand Company, 1962, I, viii.
- (7) 林治一『オーストリア学派研究序説』、有斐閣、一九六六年。

## 一 オーストリア学派

オーストリア学派は、カール・メンガーが一八七一年に『国民経済学原理』<sup>(1)</sup>を著わしたとき、その礎石が据えられた。これは「経済学の歴史のうちでも珍らしいほど、いろいろの意味において孤立した書物」<sup>(2)</sup>であるが、ミーゼスもこの点について次のように述べている。

「人々は天才の功績を少なくともある程度まで、彼の環境と、時代やその国の思潮のせいにするのを好む。この方法が功を奏する場合があったとしても、人類に影響を与えたオーストリア人たちの思想と学説について適用できないことは疑いない。<sup>(3)</sup>」

カール・メンガーは、ミーゼスら青年経済学者の会合に招かれたことがあり、メンガーが限界効用理論を発表したとき、ウィーンのだれ一人としてこの問題に興味を持つ者はなかったと淋しげにその席でミーゼスらに語ったという。メンガーの恩師も同僚も友人も、限界効用理論には興味を示さず、メンガーは全く孤独の中にあつた。ミーゼスの言葉を借りるならば、「七〇年代の終りまで『オーストリア学派』はなく、ただカール・メンガーがいたのみであ

った。<sup>(4)</sup>」

オーストリア学派という名で呼ばれたのは一八八〇年代の後半になってからであるが、それ以前には「オーストリアン (Austrian ないし österreichisch)」という形容詞が用いられていた。林治一博士によればこれは「単にドイツと対比する意味」<sup>(5)</sup>をもっていた。この形容詞は、メンガーのゼミナル出身の若き経済学者たちが、経済理論に関する論文を発表するようになってから冠せられるようになったものであるが、ミーゼスによれば、ドイツの経済学者がメンガーやその継承者たちの理論に対し、「オーストリアン」という形容詞を付して呼んだとき、それには軽蔑の意味が含まれていた。<sup>(6)</sup>

「資本主義」や「プロテスタント」という敵意をこめた呼称が、やがて正式の名称となったの軌を一にしている。

ただしこの「オーストリアン」という呼称は必ずしもその実体と一致していなかった。一方では、オーストリア人の経済学者の中にはオーストリア学派の経済学と異なる立場をとるシュンペーターのような学者があるとともに、他方では、オーストリア人でない経済学者が、メンガーの理論に基づいた論文を発表したとき、それぞれの国で反発を受け、オーストリア人でないにもかかわらず、「オーストリアン」と呼ばれた。<sup>(7)</sup>

さらに言語の上でも「オーストリアン」という形容詞は厳密さを欠いていた。メンガー、ボエーム、バヴェルクおよびヴィーザーはドイツ系オーストリア人で、著述における使用言語はドイツ語であった。その後の継承者たちの中にもストリグルのようにドイツ系オーストリア人が多かった。他方では Franz Culhel や Karel Engliš のようなチェッコ系オーストリア人もいた。<sup>(8)</sup>

その上、当時のオーストリア・ハンガリーには七つの大学があったにもかかわらず、ウィーン大学以外はオーストリア学派に属する学者の出現と直接の関係がなかった。<sup>(9)</sup>

「オーストリア学派はおおむね一八九〇年前後に学派としての実体をようやく整えるにいたり、内外ともにこの呼称をもってよび慣わされた<sup>(10)</sup>」が、やがてオーストリア学派の基本的な考え方の大部分が経済理論の一部として受容され、メンガーが死亡した一九二一年ごろには、オーストリア学派という呼称は経済学説史上の重要な一章に与えられた名称となった。ただミーゼスの貨幣的景気変動論に対して「オーストリアン」という形容詞を付して呼ぶ学者もあつたが、これとても英国の通貨主義とスエーデン人のウィクセル (Knut Wicksell) の理論を継承・発展・一般化したもので、「オーストリアン」という名称には必ずしも符合しないものであつた。<sup>(11)</sup>

ミーゼスは天才の出現に果たす環境の影響をあまり重視していないが、ウィーンに突如として咲いた学問的業績の数々は、オーストリアの自由主義が生んだものと考えている。一八六七年に皇帝をして認めさせた自由主義憲法で、検閲制度を廃止して自由な空気を旺盛せしめ、周囲の各国からすぐれた才能をもつた人々がウィーンに集まるようになった。実証主義の「ウィーン学団」が生成したのも、フロイトの精神分析に関する研究が発表されたのもこの頃であつた。

ミーゼスは学問的後進国とされていたウィーンに輝やかしい学問的業績をもたらした要因を次の三つに要約している。

- (1) 政府は教授が講義やゼミナールで教える内容について干渉する権限を持たなかつたこと。
- (2) 教授の人事について、政府は教授会の決議を尊重したこと。
- (3) 政府から給与を受けない私講師という制度があつたことなどから、大学の自治を十分に享受できたこと。<sup>(12)</sup>

オーストリア学派を世界に認めさせたのは歴史学派との方法論争 (Methodenstreit) であつたが、歴史学派のグスタフ・フォン・シュモラー (Gustav von Schmoller) たちやその弟子たちはビスマルクの国家社会主義を擁護し、

ホーエンツォルレンのプロシア官僚主義を称え、シュモラーの弟子ヴェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart) はナチスを擁護し、ヒットラー総統を神から命を受けた宇宙最大の指導者と称賛するなど、結局は国を破滅に導いてしまった。<sup>(13)</sup>

オーストリア学派はナチスの侵略によって国外に四散のやむなきに至ったが、その学風はそれぞれの国に定着して第二次世界大戦後の復興に大きな役割を果たした。既述のように、オーストリア学派という呼称はいくつかの点においてミスノーマーであったが、現在では「オーストリア」という地理的形容詞は失なわれて自由市場経済学 (free market economics) という名称の下になおその伝統が受けつがれ、その中でも最も徹底した自由主義者であるミーゼスは、米国が第二次世界大戦後、統制経済から自由主義経済に転換する際に起った多くの自由主義運動に理論的根拠を与えた。

注 (1) Carl Menger, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*.

(2) 林 治一、上掲書、四七ページ

(3) Ludwig von Mises, *The Historical Setting of the Austrian School of Economics*. New Rochelle, N. Y.: Arlington House, 1969, p. 9.

(4) Mises, *Loco. cit.*

(5) 林 治一、上掲書、一一ページ

(6) Ludwig von Mises, *op. cit.*, p. 40.

(7) Mises, *op. cit.*, p. 41.

(8) Mises, *op. cit.*, p. 42.

(9) 林 治一、上掲書、二七ページ

(10) 林 治一、上掲書、一一ページ

- (1) Mises, *op. cit.*, p. 41.
- (2) Mises, *op. cit.*, pp. 12-13.
- (3) Mises, *op. cit.*, p. 34.

## 二 ミーゼスの経歴

ミーゼスほど自己宣伝を極度に嫌悪し、自分自身について語ることを好まなかった学者は少ないであろう。講義の冒頭において学生が参考文献の列挙を希望すると、ミーゼスは自分の著書を一冊も挙げず、マルクス経済学の文献をいくつか列挙するといった調子であった。

またゼミナールの卒業生たちが研究会を組織して、そのエンブレムのデザインにオーストリア学派の学者たちの氏名を連らねた円でかこんだものを見せたところ、ミーゼスは自分の名前をそれから消すように要求した。

ミーゼスが自分自身についていかに寡黙であったかは、ヘンリー・ハズリット (Henry Hazlitt) の次の言葉によく表現されている。

「ミーゼスは彼の個人的生活に関してきわめて口数が少なく、それは彼の健康状態のような問題にさえも及んでい  
る。彼に「お元気ですか」と尋ねると、「ありがとう」とだけ答えることが多かった。つまり彼はその問いを情報に  
対する要求としてではなく、儀礼的な表現として取扱った。

事実、それが質問の真の目的であったし、ミーゼスはわれわれの大部分の者よりもずっと正直で合理的であった。  
これによって彼は気分がすぐれないのに良いといわなければならない儀礼的偽善から救われたし、聞き手は彼の病氣  
についてこまごまと聞かずにすんだ。これは客観的な討論の中では、あらゆる主観的要素を排除ないし抑圧するとい

う彼の習慣の一面に過ぎなかった。しかし私はいつの日か彼が寡黙のカーテンを押し上げて、少なくとも知的生活に  
関する簡単な自叙伝を書くようにお願いしたい。<sup>(1)</sup>」

したがって、ミーゼスがいかなる家庭に生まれ、いかなる環境の下で育ったかについては、くわしい資料が得られ  
ない。ただミーゼスともっとも密接に交わりを持ち、二十数年にわたり欠かさず彼のゼミナールに出席した弟子の一  
人、グリーヴズ教授夫人 (Mrs. Percy L. Greaves, Jr.) は、ゼミナール終了後ミーゼスをニューヨーク市のウエスト  
エンドにある彼のアパートまで自動車で送っていく途中、折に触れ時に触れてミーゼスが語った思い出話の断片をメ  
モに書きとめてあとで整理していたから、ハズリットのみならず弟子たちがこぞって求めている『ミーゼス伝記』の  
執筆者として最もふさわしい人物は彼女をおいて他にあるまい。

ここでは、ミーゼスの弟子たちが集めたいくつかの記録を統合して、ミーゼスの経歴をできるだけくわしく述べて  
みたい。

ミーゼスは、ビスマルクが三国同盟を結んだ年、すなわち一八八一年の九月二九日、オーストリア<sup>II</sup>ハンガリーの  
国鉄技師であった父 Arthur Edler と母 Adele (Landau) との間の長男として、当時のオーストリア<sup>II</sup>ハンガリーの  
レムベルク (Lemberg) に生まれた。彼の家庭環境は、経済学者を生むようなタイプのものではなかった。レンベル  
クは後にポーランド領のラヴーフ (Lwow) となり、現在はソ連のウクライナ共和国のリヴィーフ (Lwiv) となつて  
いる。それから二年後の一八八三年に彼の弟リヒャルト (Richard) が誕生した。彼は後に世界的に有名な数学者とな  
ったが、一九五一年に統計学に関する彼の著書の改訂第二版を出したのを最後に、一九五三年に死亡し、その未亡人  
ヒルダ・ガイリンガー教授 (Hilda Geringer) が、一九五七年にその英訳版を『確率、統計および真理』<sup>(2)</sup> という書名  
で出版している。



ミーゼスは一八九二年から一九〇〇年まで、ウィーンの Akademische Gymnasium において学び、一九〇〇年、ウィーン大学に進み法学と経済学を研究した。

ミーゼスが指導を受けた教授たちの中には、哲学やイデオロギーの問題に興味をもつ者はほとんどなく、社会主義者が多かった。カール・メンガーはすでに大学を去っていたが、ミーゼスはメンガーの『国民経済学原理』を読んで経済学に非常な関心をもつようになった。ミーゼスがあまり大学教育に信頼を置いていないのも、彼自身が自ら読み自ら考えて成長したからであろう。

一九〇二年、すなわち彼が二二才のとき処女出版である『ガルシアにおける領主と農民関係の発展』<sup>(3)</sup>を著したが、これは彼が生まれたガルシア地方の農民の歴史を描いたものであった。

一九〇二年から一九〇三年にかけて、ミーゼスはオーストリアハンガリー軍に入隊後、再び大学に戻り、一九〇六年二月二〇日、ウィーン大学から法学の学位を授与された。

ウィーン大学卒業後数年間は、法律関係の業務に従事していたが、一九〇九年に政府機関の一つであるオーストリア商工会議所 (Kammer für Handel, Gewerbe und Industrie) の経済顧問となり、一九三四年スイスへ移住のため辞任するまでその職にあった。

一九一二年に、『貨幣および流通手段の理論 (Theorie des Geldes und der Umlaufsmittel)』を著わし、オーストリア学派のカール・メンガーやボエームバヴェルクなどによって展開された限界効用理論を貨幣論にまで拡充し、景気変動の貨幣的説明を試みた。

一九一三年にウィーン大学の私講師 (Privat Dozent) となったが、一九一四年に、オーストリア皇太子フランツ・フェルディナンド大公夫妻が暗殺され、セルビアと国交断絶するに及び、ミーゼスもオーストリアハンガリー軍騎

兵隊砲兵大尉として従軍、ウクライナからクリミアにわたるカルパチアン山脈で東部戦線の戦闘に参加、後にはウィーン司令部付となったが、一九一八年の敗戦により復員した。

同年ウィーン大学に復帰し助教授に進み、国際連盟のオーストリア賠償委員会 (Abrechnungs Amt) の理事として一九二〇年まで在職した。

一九一九年に『国民・国家および経済』 (Nation, Staat und Wirtschaft: Beiträge zur Politik und Geschichte der Zeit) を著わした。これを読んだレプケ (Wilhelm Röpke) はミーゼスに関心を持ちはじめ、一九二二年に社会政策学会 (Verein für Sozialpolitik) がアイゼナッハ (Eisenach) で開催されたとき、<sup>(4)</sup> はじめてミーゼスに会っている。<sup>(4)</sup>

シクル教授 (John V. Van Sickle) は、オーストリア賠償委員会アメリカ代表団の副書記として勤務中、博士論文執筆のためミーゼスを訪問し、オーストリアの直接税に関する研究をまとめ一九二三年にウィーンを離れた。フェビアン社会主義的な傾向をもっていた青年シクルは、<sup>(5)</sup> ミーゼスに接しその著書を読むうちに彼の影響を強く受け、自由主義を熱烈に支持するようになった。<sup>(5)</sup>

一九二二年にミーゼスは『共同経済』 (Die Gemeinwirtschaft: Untersuchungen über den Sozialismus) <sup>(6)</sup> を一九二三年には『通貨安定問題の貨幣理論的側面』 (Die geldtheoretische Seite des Stabilisierungsproblems) <sup>(7)</sup> を出版するなどきわめて意欲的な研究活動を続けていたが、一九二六年にロックフェラー財団 (Lama Spellman Rockefeller Foundation) の後援により、アメリカ合衆国の大学を講演旅行するため渡米した。

一九二七年には『自由主義』 (Liberalismus) <sup>(8)</sup> を著わしたが、社会主義者であったアルベルト・フーノルト (Albert Hunold) はこれを読んでミーゼスに興味を持ちはじめ、一九二八年九月に社会政策学会がチェーリッヒで開催された

とき、フーノルトはじめてミーゼスに会った。

そもそも社会政策学会は一八七二年にグスタフ・シュモローラーが結成したものであって、講壇社会主義者の団体として命名をはせていた。

チューリッヒ大会では「資本主義の危機」と題して発表を行なったゾンバルト (Werner Sombart) と、「景気理論」のオイケン (Walter Eucken) との間でパネル・ディスカッションがなされたが、シュモローラーは当時すでに政治学者として有名であったのに対して、オイケンはまだ私講師で無名に等しい存在であった。三〇〇名あまりの出席者の中でゾンバルトの社会主義思想を次々に批判していく頭脳の回転の早い人物がフーノルトに強烈な印象を与えたが、これがミーゼスであった。

フーノルトは社会主義者の市会、社会主義者の行政機関ならびに社会主義者の教育委員会の下で中等学校の教育をしているうちに、社会主義哲学が注ぎ込まれ、自由な発想や行動が失なわれていたことを、ミーゼスに触れることによって発見し、社会主義から完全に脱却する契機となった。

社会主義全盛期のチューリッヒ大学でゾンバルトを軽べつし、ミーゼスを賞讃した若きフーノルトの姿は、当時の大学教授たちから見ると古い世代に反抗する青年の通弊として映じたかも知れないが、フーノルトにとっては単なる反抗などというものではなく、ミーゼスの思想に触れたこと<sup>(9)</sup>によって、まさに新天地が開けた思いであったという。

ミーゼスは一九二八年に『貨幣価値安定と日和見主義政治』<sup>(10)</sup>、二九年に『干渉主義批判』<sup>(11)</sup>を著わすなど、ますます精力的な活動を示した。

一九三一年には米国のワシントン市で開催された国際商工会議所大会に出席した。また一九三〇年一二月に行なった講演をもとに、『経済危機の原因』<sup>(12)</sup>を出版した。

一九三三年には、ミーゼスが一九二八年から一九三二年までに発表した論文に新論文一篇を加えて、『国民経済学の基本問題』<sup>(13)</sup>を出版したが、時をほぼ同じくしてヒトラー内閣の出現を見た。

ヒトラーはレプケ教授をその自由主義思想のゆえに罷免し、これがヒトラーによる自由主義経済学者弾圧の最初の犠牲者となった。

危険をさとったミーゼスは、ウィーン大学でゼミナールを開きうるのもこれが最後となるであろうと弟子たちに語ったが、大多数の者はそのような事態になろうとは信じられなかった。しかしミーゼスは、自分の弟子であるが故に弾圧の犠牲となることのないように、できるだけ早く国外に脱出するよう力説した。

そしてミーゼス自身は一九三四年にラパード (William E. Rappard) 学長の招きを受け、スイスのゼネバにある国際研究大学院 (Institute Universitaire de Hautes Internationales) の正教授に就任、国際経済関係の講義を担当するようになった。

一九三八年七月六日、マルグリット (Margrit Sereny-Herzfeld) とゼネバで結婚した。

ミーゼスはこの静かな環境の中で研究に専念し、経済学を人間行為学的に取扱った彼の主著『国民経済学』<sup>(14)</sup>を一九四〇年に完成することができた。しかし前年の九月に第二次世界大戦が勃発し、一九四〇年の五月にはドイツ軍がベルギー、オランダ、ルクセンブルグに侵入したため、遂にスイスにも動員令が下った。

ミーゼスは三八年から同じ大学院に招かれていたレプケとともに、夜陰にまぎれミルク列車に便乗して、チューリッヒにある米国大使館にようやくの思いでたどりつき、査証をえて米国へ渡ったのである。<sup>(15)</sup>

一九四四年までミーゼスは全米経済調査会 (National Bureau of Economic Research) で研究に従事し、その間、戦時中といえども物価統制を不可とするミーゼス教授と統制を主張するガルブレイス教授との間で論争が展開された。

同年、ナチスの勃興と国家による経済干渉の危険性をあらゆる角度から取扱った『全能政府』(Omnipotent Government)<sup>(16)</sup>と、利潤追求的経営と官僚主義的経営の特徴を対比分析した『官僚主義』(Bureaucracy)<sup>(17)</sup>を著わしてゐる。

一九四五年からは、ニューヨーク大学の経営学大学院(New York University Graduate School of Business Administration)の客員教授となり、前期 Socialism and the Profit System 後期 Government Control and the Profit System 全期 Seminar in Economic Theory を担当し、一九四六年に米国へ帰化した。

また同年にコーネル大学のマーケティング教授であったハーパー(F. A. Harper)とカーチス(William M. Curtis)、全国産業会議事務局(National Industrial Conference Board)の事務局長リード(Leonard E. Read)とともに、経済教育財団(Foundation for Economic Education, Inc.)を創立したが、この非営利研究機関は今日もなお活動を続けている。

一九四六年から五五年まで、全国製造業者協会(National Association of Manufacturers)の顧問をつとめた。一九四七年には『計画による混乱』(Planned Chaos)<sup>(18)</sup>を著わし、経済計画をめぐる政策は当初の企図とは逆に混乱を生むのみであると主張した。

一九四九年には、ジュネーブ時代に著わした『国民経済学』をもとに英文で増補改訂した『人間行為学』(Human Action)<sup>(19)</sup>が出版され、一九五二年には、一九四五年以降に発表した論文七篇を収録した『自由のための計画』(Planning for Freedom and Other Essays and Addresses)<sup>(20)</sup>が出版された。

また一九五六年には『反資本主義の心的状態』(The Anti-Capitalistic Mentality)<sup>(21)</sup>を著わしたが、これは「U.S. ニューズ・アンド・ワールド・リポーツ」誌にリプリントされた。

この年はミーゼスが学位を授与されて五十周年に当るので、彼の弟子たちが記念論文集『自由と自由企業について』(On Freedom and Free Enterprise)<sup>(22)</sup>を出版した。

一九五七年には『理論と歴史』(Theory and History)<sup>(23)</sup>を出して、経済学における彼の哲学的見解を明らかにした。またこの年には、ペンシルベニア州のグローヴ・シティー大学(Grove City College)から名誉法学博士の学位が与えられた。

一九六一年には、ミーゼスの八十才の誕生日を記念して、モンペルラン協会の機関誌である *The Mont Pelerin Quarterly* の十月号が、ミーゼス特集号として発行され、弟子たちや友人たちがミーゼスの功績をたたえた。

一九六二年には、『経済科学の根底』<sup>(24)</sup>を著わし、同年一月二〇日には、オーストリア政府から経済学に対する功績により、名誉章(Oesterreiches Ehrenzeichen zur Kunst und Wissenschaft)が授与された。

さらに翌一九六三年六月には、ニューヨーク大学から名誉法学博士の学位が、一九六四年六月には西ドイツのフライブルク大学から名誉政治学博士の学位がそれぞれ贈られた。

一九六五年からテキサス州のプレイノウ大学(Plano University)の客員教授を兼ね現在に至っている。

一九六六年にミーゼスが八十五才の誕生日を迎えたとき、ウィーン時代の弟子たちが多数集まり、恩師をかこんで懐古談に花を咲かせた。

そのときハーバード大学のハーバラー(Gottfried Haberler)教授は、ウィーン時代のミーゼスの弟子たちの名前を一人一人読み上げてその近況を報告したが、その中にはすでに死亡している者が少なからず、今日生きながらえて世界各地で経済学者として活躍している弟子たちは、ミーゼスの「国外に脱出せよ」との言葉を信じて行動に移した者たちであって、自分たちが今日あるのは、すべてミーゼスの先見の明に負うところが大きいと感謝の言葉を述べた。

ミーゼスは立って「書物こそ最良の大学である」と述べ、偉大な学者はその業績のほとんどを読書と思索とによって築き上げたものであり、大学という制度化された教育機関が独創的思想を生むものではないことを強調した。彼はカール・メンガーによって例証したが、それはミーゼス自身にも当てはまることである。

ミーゼス夫人によれば、あまりにも大きな感動と、愛する弟子たちを失なった悲しみのあまり、その夜ミーゼスは一睡もしなかったという。<sup>(25)</sup>

多年研究と教育に全身全霊を傾注してきたミーゼスも、一九六九年の六月をもって遂にニューヨーク大学を退職した。同年九月、アメリカ経済学会 (American Economic Association) は、彼を「傑出した学者 (Distinguished Fellow)」として、次のようにその功績を表彰した。

「ルートヴッヒ・フォン・ミーゼスの著書を初版に限定すればその数は一九冊となり、改訂版と外国語への翻訳をすべて含めれば四十八冊に及び、彼が寄稿した記念論文集その他を加えれば、その数はさらに多くなろう。このような出版物の輩出は一九〇二年に始まった。ミーゼスは本年九月に八十八才となる。彼はウィーン大学で一九三四年まで、ゼネバの大学院で一九四〇年まで教鞭をとった。彼はなおニューヨーク大学で教職にある。彼のゼミナール出身の学者が輩出したことも、彼の著書の産出に劣らず顕著な事実である。

彼が発表した研究業績は、経済史や経済思想史から方法論や政治学にまで及び、特に貨幣理論、国際金融、景気変動、価格と賃金理論、産業組織および経済体制が強調されている。多年にわたってミーゼスが創始し伝播した考えを評価することはできないであろうが、もっとも実り多きものの一部をあげるならば、貨幣理論では限界効用理論を貨幣需要の説明に適用したこと、景気変動論ではウィクセルの累積過程の理論の一部を修正し、物価指数の一部を安定させる貨幣政策は、同時に事業活動を安定させえないことを示したこと、社会主義経済計画の理論においては、資源

の能率的な配分に必要な経済計算の方式は、競争市場の価格体系がなくては行ないえないことを発見したことである。最近ソビエト型のいくつかの経済において、分権的計画に向う動きがあるのは、ミーゼスが五十年近い昔に到達した洞察を歴史が裏付けたものである。<sup>(26)</sup>

一九七一年には、ミーゼスの九十才の誕生日を祝して、『自由に向って』(Toward Liberty)<sup>(27)</sup>と題する論文集がハイク教授その他を編集委員として出版され、これにはアルゼンチン、オーストリア、イングランド、フランス、ドイツ、グアテマラ、イタリー、日本、メキシコ、オランダ、ペルー、スコットランド、スウェーデン、スペイン、南アフリカ、アメリカ合衆国、ウルグアイの諸国から合計六十六篇の論文が、ミーゼスの弟子や友人によって寄稿され、二巻に分けて収録されている。

ミーゼスは、ここに列挙した大学のほか、アルゼンチン、チェコスロバキア、イングランド、フランス、ドイツ、グアテマラ、イタリア、オランダ、ペルーなどへも招かれて講演を行なっている。

### 三 ウィーン時代のゼミナール

ミーゼスのゼミナールをウィーン時代とニューヨーク時代とに分け、それぞれの印象と参加者について述べてみよう。

ウィーン大学時代の弟子であるハーバラー (Gottfried Haberler) は、当時の印象を次のように回想している。

「ゼミナールは毎週金曜日の午後七時、商工会議所のミーゼスの事務所で開催された。常に激論が午後一時まで続き、一同は近所のイタリア料理店のアンコーラ・ヴェルデ (Ancora Verde) に行つて食事をしながら議論を続けた。一一時半になって、なお元気のある者は、ウィーン大学の向いにあるカフェー・キュンストラー (Café Künstler)



に押しかけたが、ここは当時経済学者がよく集まる場所であった。ミーゼスは必ずカフェー・キュンストラーに行き、最後まで残ってから家路につき、午前一時より早く帰ることは決してなかった。

翌朝になると彼はひな菊のような新鮮さをもって九時には事務所に現われた。八〇才の今日でも彼の遅寝早起の習慣はなおも続いている。<sup>(28)</sup>

ハーバラーの記録によってミーゼスのゼミナールの参加者を列举し、それぞれの近況を学者名鑑などによって調査した結果を附記すれば次のようになる。

ハイエク (F. A. Hayek) —— 一九九九年ウィーンで出生。ウィーン大学から法学と経済学の学位を授与され、一九二二年から一九二六年までオーストリアの官吏、一九二七年にオーストリア景気研究所長に転じ、一九二九年にウィーン大学の講師となり、一九三一年にロンドン大学の客員教授に迎えられ、経済学と統計学の講義を担当、のち正教授となった。彼はミーゼスの弟子の中で最初にウィーンを離れた学者となったわけである。一九五〇年から六二年まで、シカゴ大学で社会科学 (Social and Moral Science) の講義を担当、一九六二年から西ドイツのフライブルク大学で経済学を教えていたが、現在はオーストリアのザルツブルク大学の国民経済研究所 (Institut für Nationalökonomie) にいる。

マツハルプ (Friz Machlup) —— 一九〇二年ウィナーノイスタットに出生。一九二三年にウィーン大学から政治学の学位をえて同大学の講師となり、一九三三年に米国へ移住、一九三四年にハーバード大学客員講師となり、その後バッファロー大学、ジョンズ・ホプキンズ大学経済学教授を経て、一九六〇年からプリンストン大学の経済学および国際金融論の教授として現在に至っている。

ハーバラー (Gottfried Haberler) —— 一九〇〇年生まれ、一九二八年ウィーン大学講師となり後に教授に進み、経

経済学と統計学を教えていたが、一九三六年に米国へ移住、ハーバード大学の経済学教授となり現在に至っている。

シュッツ (Alfred Schütz)——コロンビア大学の教授となったが死亡。

シクル (John V. Van Sickle)——米国から留学したことは既述のとおりであるが、ヴァンダービルト大学を経て現在ウオバッシュ大学の名誉教授。

以上の他に、ミーゼスのゼミナルに参加した学者として、カリフォルニア大学のエリス (Howard S. Ellis)、ロンビア大学の経済学教授で故人となったヌルクセ (Ragner Nurkse)、スタンフォード大学のボード (Karl Bode)、プリンストン大学のモルゲンシュテルン (Oskar Morgenstern)、故人となった著名の経済学者シュレシンガー (Karl Schlesinger) およびシュトリグル (Richard Strigl) などがあげられている。

日本から留学した学者は、故荒木光太郎教授 (一九二五年) および、一谷藤一郎教授であった。

#### 四 ニューヨーク時代のゼミナル

講義の場合のミーゼスは教卓に向って正しく両ひざをそろえ、武士が論語でも講義しているような端正な姿勢をもって終始した。講義の内容は、彼の著書に親しんでいる者にとっては格別耳新しいものではなかったが、初めてミーゼスの講義を聞いた者は、非常なインパクトを受けた。

ミーゼスは講義の冒頭に質問紙を提出せしめ、それに一つ一つ回答してから講義に入った。彼はこれによって毎週の講義をどのように学生が受けとめているかを確認していたのではないかと思われる。

これと対照的なのがゼミナルであった。一九六〇年に経営学大学院の建物が改築されるまでは、ワシントン広場の北側にあるゼミナル教室が用いられていたが、入口にライオンの彫刻が置かれたタウンハウスの石段を登って部

屋に入ると、名士の邸宅に招かれたような豪華さと暖かさがあふれていた。

ミーゼスは前回のゼミナール以後の読書と思索の中から、新しいテーマを見出し、次のゼミナールの冒頭に問題提起して、ゼミナール参加者の討論を求め、その間に彼の見解を示していく方法をとっていた。

二十数年にわたってミーゼスのゼミナールに欠かさず出席したグリーヴズ教授によれば、その間に同じテーマが提起されたことはほとんどなく、毎回必ず何か教えられるところがあったという。

「討論の間に、ゼミナールの学生に何か独創的な見解の片鱗を見出すといつても、ミーゼス教授は『それを論文にまとめ給え』<sup>(29)</sup>と行って激励するのが常であった。独創的な考えは、たまにしか生まれないものであるから、彼からそのようなコメントを受けることは、学生にとってたしかに大きな名誉であった。」

窓のない十階建の新校舎ができてからは、モダンで機能的なゼミナール教室を使用するようになったが、ワシントン広場のタウンハウスの方がやはりミーゼスのゼミナールには似合っていた。

ミーゼスは講義のある月曜日は夫人の運転する自動車で大学に来て、帰りは地下鉄を利用し、木曜日のゼミナールの日はグリーヴズ教授夫妻の自動車で帰るのを常とした。

ミーゼスは志村喬の「生きる」という東宝映画が上映されたとき、ストーリーは退屈だが日本の役人のビュロクラシーの一面がでていて面白いので是非見るように学生にすすめたことがあった。

一年で最後の講義を終え教室を出たミーゼスが、地下鉄の駅まで、いかにもうれしそうな表情でオペラの一節を口ずさみながら歩いていく姿に、音楽の都ウィーンで育った人間ミーゼスの一面を垣間見た気がした。

ニューヨーク大学時代の彼のゼミナールからは次の学者が生まれている。

センホルツ (Hans F. Senholtz)——一九二二年ドイツ生まれ、コロウン大学から政治学の学位を得たのち米国に

移住、ミーゼスの指導をうけ一九五五年ニューヨーク大学哲学博士、現在はグローヴ・シティー大学の経済学部長。

ピーターソン (William H. Peterson) —— 一九二一年ニューヨーク生まれ。コロンビア大学を経てミーゼスのゼミナールに入り、ニューヨーク大学哲学博士、一九五三年よりニューヨーク大学経済学準教授、のち教授となり、ニクソン大統領の経済顧問、現在は商務省社会経済統計局先任顧問。

グリーヴズ (Percy L. Greaves, Jr.) —— 一九〇六年ブルックリン生まれ。シラキュース大学を経てコロンビア大学およびニューヨーク大学の大学院において経済学を研究。一九四五—四六年には、真珠湾攻撃真相調査両院合同委員会の少数派委員として、攻撃を事前に知りながら真珠湾の司令官に解読した暗号を知らせなかった疑いをもち、真相の究明に当った。ミーゼスのゼミナールに参加して以来、研究に専念し、現在はプレイノウ大学教授。

カーズナー (Israel M. Kirzner) —— ロンドン生まれ、ケープタウン大学、ロンドン大学、ブルックリン大学を経て、ミーゼスゼミナールに入り、ニューヨーク大学哲学博士、現在はニューヨーク大学経済学教授。

ロスバード (Murray N. Rothbard) —— 一九二六年ニューヨーク生まれ、コロンビア大学哲学博士、のちミーゼスのゼミナールに入り、現在ブルックリン工芸大学 (Polytechnic Institute of Brooklyn) 経済学教授。

この他にもミーゼスのゼミナール出身の学者が多数あるが、筆者と何らかの点で接触があつて近況の明らかな者のみに限定した。

一九七二年の九月二九日をもって、ミーゼスは九一才を迎える。晩年のミーゼスはインフレを特に懸念していた。もしだれかインフレを終息させることに成功すれば、その名は人類史上永遠に称えられるであろうといっていた。高令に達した現在でも、多年にわたる研究生活の習慣から、読書と執筆を欠かさない。この夏もニューヨークの炎暑を避け、ヴァーモントにあるシャレーのベランダから美しい風光を眺めながら、祈るように手を組んだ、あの特徴のあ

るポーズで静かに思索にふけってゐることをあつひ。

## 附記

筆者を一九五九—六〇年度ウイリアム・ボルカー・フェロー (William Volker Fellow) に採用し、ミーゼスに直接師事する機会を与えられたニューヨーク大学に対して、深甚の謝意を表するものである。

- 注
- (1) Henry Hazlitt, "In Honor of Ludwig von Mises" in the *Mont Pelerin Quarterly*, Vol. 3, No. 3, Oct. 1961, pp. 9-10.
  - (2) Richard von Mises, *Probability, Statistics and Truth*, 2nd ed. prepared by Hilda Geiringer. London: George Allen & Unwin Ltd., 1957.
  - (3) Ludwig von Mises, *Die Entwicklung des gutsherrlich-bäuerlichen Verhältnisses in Galizien (1772-1848)*. Wien und Leipzig: Franz Deuticke, 1902.
  - (4) Wilhelm Röpke, "Homage to a Master and a Friend," *Mont Pelerin Quarterly*, p. 6.
  - (5) John V. Van Sickle, "What Mises Did for Me," *Toward Liberty: Essays in Honor of Ludwig von Mises on the Occasion of His 90th Birthday, September 29, 1971*. Menlo Park, Calif.: Institute for Hamane Studies, Inc., 1971, Vol. II, p. 392.
  - (6) Ludwig von Mises, *Die Gemeinwirtschaft: Untersuchungen über den Sozialismus*. Jena: Gustav Fischer, 1922.
  - (7) Ludwig von Mises, *Die geldtheoretische Seite des Stabilisierungs-problems*. München und Leipzig: Duncker & Humblot, 1923.
  - (8) Ludwig von Mises, *Liberalismus*. Jena: Gustav Fischer, 1927.
  - (9) Albert Hunold, "How Mises Changed My Mind," *Mont Pelerin Quarterly*, pp. 16-17.
  - (10) Ludwig von Mises, *Geldwertstabilisierung und Konjunkturpolitik*. Jena: Gustav Fischer, 1928.
  - (11) Ludwig von Mises, *Kritik des Interventionismus: Untersuchungen zur Wirtschaftspolitik und Wirtschaftsideologie der Gegenwart*. Jena: Gustav Fischer, 1929.

- 22
- 21 Ludwig von Mises, *Die Ursachen der Wirtschaftskrise: Ein Vortrag*. Tübingen: J. C. Mohr (Paul Siebeck), 1931.
- 22 Ludwig von Mises, *Grundproblem der Nationalökonomie: Untersuchungen über Verfahren, Aufgaben und Inhalt der Wirtschafts und Gesellschaftslehre*. Jena: Gustav Fischer, 1933.
- 23 Ludwig von Mises, *Nationalökonomie: Theorie des Handelns und Wirtschaftens*. Genf: Éditions Union, 1940.
- 24 Wilhelm Röpke, *op. cit.*, p. 6.
- 25 Ludwig von Mises, *Omnipotent Government: The Rise of the Total State and Total War*. New Haven: Yale University Press, 1944.
- 26 Ludwig von Mises, *Bureaucracy*. New Haven: Yale University Press, 1944.
- 27 Ludwig von Mises, *Planned Chaos*. Irvington-on-Hudson, N. Y.: Foundation for Economic Education, Inc., 1947.
- 28 Ludwig von Mises, *Human Action: A Treatise on Economics*. New Haven: Yale University Press, 1949.
- 29 Ludwig von Mises, *Planning for Freedom, and Other Essays and Addresses*. South Holland, Illinois: Libertarian Press, 1952.
- 30 Ludwig von Mises, *The Anti-Capitalistic Mentality*. Princeton, N. J.: D. Van Nostrand Co., Inc., 1956.
- 31 Mary Senholz (ed.), *On Freedom and Free Enterprise: Essays in Honor of Ludwig von Mises*. Princeton, N. J.: D. Van Nostrand Company, Inc., 1956. この記念論文集の巻頭に「ミーゼスの履歴が簡潔に述べられておられ、拙稿の發表の1報として参照した。
- 32 Ludwig von Mises, *Theory and History: An Interpretation of Social and Economic Evolution*. New Haven: Yale University Press, 1957.
- 33 Ludwig von Mises, *The Ultimate Foundation of Economic Science: An Essay on Method*. Princeton, N. J.: D. Van Nostrand Co., Inc., 1962.
- 34 グリーノブス教授夫人より筆者への私信による。
- 35 *American Economic Review*, September 1969 (LIX, No. 4, part 1) frontispiece.
- 36 F. A. Hayek et al (ed.), *Toward Liberty: Essays in Honor of Ludwig von Mises on the Occasion of his 90th*

*Birthday, September 29, 1971.* Menlo Park, Calif.: Institute for Humane Studies, Inc., 1971.

⊗ Cottfried Haberler, "Mises' Private Seminar," *The Mont Pelerin Quarterly*, p. 21.

⊗ Toshio Murata, "Soaring Urban Land Prices and Market Economy," *Toward Liberty*, p. 322.